

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 其格其

論 文 題 目

Synchronic and Diachronic Aspects of Adnominal Past Participles  
in English

(英語における名詞修飾過去分詞の共時的通時的諸相)

論文審査担当者

主査 名古屋大学教授 田中 智之

委員 名古屋大学教授 大室 剛志

委員 名古屋大学教授 滝川 睦

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、英語における名詞修飾過去分詞について共時的・通時的観点から考察し、その統語構造と歴史的発達を生成文法理論の枠組みにおいて明らかにしようとしたものである。第1章では、本論文で取り扱う名詞修飾過去分詞の共時的・通時的諸相を概観し、それが提起する経験的・理論的問題を整理している。

第2章では、現代英語における名詞前位修飾の過去分詞について、範疇に基づく従来の分類（形容詞 vs. 動詞）を破棄し、時間軸における変化を伴うイベント用法とそれを伴わない状態用法に分類している。両者とも動詞句の上位と下位に相を表す Asp(ect)の投射を含む構造を持つが、状態用法では上位の Asp が動詞の表す事態を状態へと変換する機能を果たすのに対し、イベント用法では文法相を表す上位の Asp の存在により、結果、経験、習慣、(未)完了など様々な意味を表すことができると主張している。そして、名詞前位修飾の過去分詞の形成には、統語論（項構造）、意味論（被動性）、語用論（情報的価値）に関する認可条件が作用していると述べている。第3章では、現代英語における名詞後位修飾の過去分詞を含む名詞句の構造について考察している。名詞後位修飾の過去分詞はイベント用法のみを持つ縮約関係節であるが、叙述を表す機能範疇 Pred(ication)の具現形である as がその前に生じることから、Asp の上位に PredP を含む構造を提案している。この構造において、まず先行詞の名詞句が PredP の指定部に移動して叙述関係を確立し、次に PredP の外部に移動して限定詞に選択されることにより、縮約関係節である過去分詞と修飾関係を築くとしている。

第4章では、名詞前位修飾の過去分詞の歴史的発達について、結果性を担う範疇の変化という観点から説明を試みている。古英語における名詞前位修飾の過去分詞には接頭辞が付加されており、その接頭辞が占める語彙相を表す下位の Asp が結果性を担っていたため、状態変化を表す動詞に基づく過去分詞のみが許されていたが、初期中英語に接頭辞が消失した結果、上位の Asp が結果性を担うようになったと提案している。その帰結として、様々な種類の動詞が名詞前位修飾の過去分詞として生じるようになり、イベント用法が出現したが、特に非対格動詞に基づく過去分詞に関する歴史コーパスを用いた調査により、その帰結の妥当性を実証している。第5章では、名詞後位修飾の過去分詞に関係する語順変化について論じている。過去分詞と前置詞句の語順に関して歴史コーパスを用いた調査を行い、前置詞句が過去分詞に先行する語順が、主要部後続型の基底構造が既に消失した初期近代英語まで可能であったことを観察し、その語順が前置詞句の左方移動により派生され、結果として文末に位置する過去分詞が焦点化される効果を持つとしている。そして、当該の語順が消失したのは、焦点要素が文末位置を占める必要があるという情報構造上の条件が緩和されたため、前置詞句の移動なしに過去分詞を焦点化できるようになったからであるとしている。

第6章では、本論文の内容の総括、本論文の経験的・理論的貢献を述べるとともに、残された問題とその可能な解決策を提示し、今後の研究動向を展望している。

## 論文審査の結果の要旨

現代英語における名詞修飾過去分詞についてはある程度の研究の蓄積があるものの、標準的と呼べるような有力な分析がなく、その分類、解釈、統語構造に関して未解決の問題が残されている。また、名詞修飾過去分詞の通時的側面を扱った研究はほとんどなく、その歴史的発達の全体像は必ずしも明らかではない。本論文は、英語における名詞修飾過去分詞の共時的・通時的側面を生成文法理論の枠組みにおいて論じた初めての本格的な研究であり、特に以下の2点において非常に高く評価される。

第一に、歴史コーパスを用いた丹念な調査により、名詞修飾過去分詞の歴史的発達の全体像を明らかにしたことが挙げられる。他動詞に基づく名詞修飾過去分詞は古英語から存在しているが、第4章では数少ない先行研究で提示されているデータを精査した上で、非対格動詞に基づく名詞前位修飾の過去分詞が初期近代英語に出現したことを実証している。さらに、第5章では前置詞句が過去分詞に先行する語順について調査を行い、定形節ではその語順が後期中英語に消失したのに対し、名詞後位修飾構造では初期近代英語まで可能であったことを観察し、主要部後続の特性がごく最近まで存続していたことを発見した。これらの調査により、名詞修飾過去分詞の歴史的発達の全体像を明らかにしたことは、言語事実の発掘という経験的領域における歴史言語学に対する大きな貢献である。

第二に、現代英語における名詞修飾過去分詞の新たな統語構造を提案し、その統語・意味特性、および現代英語に至る歴史的変遷に説明を与えたことが挙げられる。第2章では現代英語における名詞前位修飾の過去分詞について、文法相を表す上位の **Asp** と語彙相を表す下位の **Asp** からなる構造を提案し、過去分詞の様々な解釈を説明することに成功している。第3章では現代英語における名詞後位修飾の過去分詞について、叙述を表す **Pred** を含む構造を提案し、先行詞の名詞句と過去分詞が修飾関係だけでなく叙述関係を結ぶという事実を自然に捉えている。さらに、第4章では結果性を担う範疇が下位の **Asp** から上位の **Asp** へと変化したという仮説の下、能格動詞およびそれに基づく過去分詞が生産的になったことを動機として、類推拡張により非対格動詞に基づく過去分詞が出現したと説明しているが、言語変化の説明に求められる動機とメカニズムを明示することによって、非常に説得力のある議論となっている。

しかし、本論文の考察に問題がないわけではない。論文の全体を通じて、過去分詞の名詞前位修飾と後位修飾の関係についての議論が不足している。また、第5章では前置詞句が名詞後位修飾の過去分詞に先行する語順の消失を、情報構造に関する条件の緩和に関連付けているが、その関連性が必ずしも明らかではない。しかし、これらの問題は今後の研究によって解決可能であり、丹念な資料調査に基づく名詞修飾過去分詞に関する共時的・通時的研究である本論文の価値を損なうものではない。

以上により、審査委員一同、本論文が博士（文学）の学位を授与するのに相応しい水準の研究であると判断した。